

シリーズ②

ウィズ/ポストコロナ時代における都市政策—自治体と地域イベント運営—

住民総参加型スポーツイベント「チャレンジデー」と名寄市の取組みについて

名寄市こども高齢者支援室室長 松田 慎司

「チャレンジデー」は、カナダ発祥（1983年）のスポーツ交流イベントである。日本では1993年から、「住民の健康づくり」や「まちの活性化」を図るきっかけづくりのイベントとして実施され、15分以上スポーツ活動を行った住民の参加率を自治体同士で競い合うものである。本稿では、名寄市の「市民の健康意識の醸成と健康づくり」を目的に実施をしてきた運動の習慣化に向けた取組みとコロナ禍におけるイベントの開催方法など、その概要について紹介する。

1 はじめに

名寄市は、北海道の中央に位置し、1級河川である天塩川と名寄川が合流する、夏冬の気温の寒暖差が約60℃、降雪量の平均積雪深が120cm前後となる、豊かな自然溢れる農業を基幹産業として発展をしてきた地域である。主要作物であるモチ米は、伊勢の「赤福」の原材料として使われている。

2006年3月に、旧名寄市と旧風連町が合併し新名寄市として誕生しており、市立総合病院、国保診療所、市立大学、陸上自衛隊駐屯地などを有する、旭川市以北の道北地域の中核都市として位置づけら

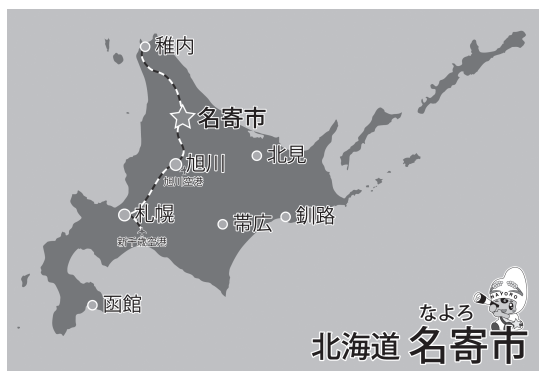
れている。

2 ヘルシーコンペの実施

1988年2月、手狭になっていた母子健康センターの建て替えとして、各種の健康相談、健康診断、リハビリの実施と肢体不自由児のためのマザーズホームの機能を併せ持つ施設として、新たに名寄市保健センターが建設された。施設のオープンを契機に、高齢化社会と国民健康保険の給付率の抑制を見据え、健康問題を市民一人ひとりが考え、自分の健康は自分で守る意識を高めることを目標に「なよろ健康まつり」を実施してきた。講演会、健康ラジオ体操やジョギング、簡易キットによる血液検査などを通して健康意識の醸成を目指し、合わせて、姉妹都市提携を結んでいるカナダ国リンゼイ市（現カワサレイクス）との間で、「チャレンジデー」の前身となる、お互いの町の住民が運動をした参加率を競う「名寄・リンゼイ・ヘルシーコンペ」が開催された。

栄えある第1回のヘルシーコンペは、市民ラジオ体操やジョギング企画などを実施し、住民の参加率は名寄市が20.9%、リンゼイ市が33.6%という結果であった。1988年から1993年までの6年間は、リンゼイ市との間で友好都市イベントとして実施をし

図1 名寄市の位置



出典：名寄市

て来たが、名寄市の参加率は10～30%台を行ったり来たりと中々参加率が上がらない状況が続いていた。一方、リンゼイ市は30～80%台と年々参加率が上昇しており「健康」に対する住民意識が非常に高いことが伺えた。

3 「チャレンジデー」への参加

1993年に、笹川スポーツ財団（SSF）が主催をする「チャレンジデー」がスタートする。「住民の健康づくり」や「まちの活性化」を図るきっかけづくりの住民総参加型イベントとして、毎年5月の最終水曜日に15分以上の運動を行った住民の参加率を自治体間で競うものである。

名寄市は低迷していた住民の健康意識の向上と市街地の活性化を進めるべく、翌年の「チャレンジデー'94」から参加をしてきた。ヘルシーコンペ時代の反省と15分以上の運動をするという「チャレンジデー」の特色などを踏まえ、新たな企画への取組みを進めた。1つの会場で日中に行っていた健康ラジオ体操を市内小学校のグラウンドへ会場を移し、勤労者を含む多くの市民が参加し易いよう「早朝ラジオ体操」としてリニューアル、また、市内各事業所へのポスター掲示と15分以上何かしらの運動をする呼びかけ、また、新たな企画として市民へのイベントPRと商店街活性化を目的に「市民綱引き大会」を商店街前の道路を夕方から封鎖して実施するなど、「チャレンジデー」という新たなネーミングを活用しながら、健康意識の醸成に向けた取組みを進めた。その結果、住民の参加率は前年度の17.8%から33.2%へ上昇し、一定の成果が表れたのである。

これを契機として、参加率向上のために早朝ラジオ体操の会場増設や市民綱引き大会の部門分け（小学・中学・一般）と天候に左右されないために屋外から屋内へ会場変更、体操教室やジョギング教室の開催、市内各事業所におけるラジオ体操実施、地元FM局の協力によるイベント生中継など、改善や工夫を行うことで1995年以降、年々参加率が上昇することとなった。2002年には過去最高の住民参加率69.8%（参加者19,251人／総人口27,538人）を記録し、その後も60%台の住民参加率を維持していくこととなる。

写真1 早朝ラジオ体操



出典：名寄市

写真2 市民綱引き大会



出典：名寄市

4 新型コロナウイルス感染症の蔓延

2020年1月、日本国内で初めて新型コロナウイルスが発見されて以降、急激なスピードで日本中に感染拡大が広がり、新型コロナウイルス感染拡大防止対策が講じられることとなる。2020年4月7日には1度目の緊急事態宣言が発せられ、同年5月25日まで約2か月に渡り、社会・経済活動の自粛を余儀なくされることとなる。毎年5月の最終水曜日に実施をしている「チャレンジデー」もそのあおりを受け、2020年度は全国的に中止となる。

これ以降、緊急事態宣言は3度発せられ、地域を限定したまん延防止等重点措置期間も複数回発せられるなど、2年以上に渡る新型コロナウイルス感染症拡大防止対策が求められたのである。

5 「チャレンジデー」の再開

4度目の緊急事態宣言が明ける2021年10月、2年振りとなる「チャレンジデー」を同年10月の最終水曜日に実施するとの案内が届き、名寄市も参加をする方向で準備を進めた。

チャレンジデー実行委員会の中では、緊急事態宣言が明け1か月も経過していなく時期尚早との意見やコロナ禍で家に閉じこもりがちとなっている住民には運動をする機会が必要だと賛否両論ではあったが、少しでも今までの日常を取り戻したいとの思いから、「徹底した感染対策」をキーワードに実施に向かったのである。

コロナウイルス感染症が完全に終息していない中でイベント実施となるため、住民からの賛同がどこまであるのか判らないままの準備となったが、主催者である笹川スポーツ財団からも、感染対策を十分に行ったプログラムとして、全国共通の運動企画が提案されるなど、民間と自治体が協力をしながら実現に向かっていったのが印象的である。

名寄市では、長引くコロナ禍において住民は運動不足になっている事に焦点をあて、不特定多数の人が集まり感染対策が非常に難しくなる早朝ラジオ体操や市民綱引き大会などの大規模イベントは中止にしたが、個人や家庭内でできる事をメインとして考え、小学校へはクラスごとに軽運動に取り組んでもらう「学校チャレンジ」、市内の事業者へも少人数で軽運動に取り組んでもらう「事業所チャレンジ」、運動不足の解消やフレイル予防に繋がる動画を作成しYouTubeで配信、名寄市が進めるスポーツコミッション事業による少人数軽スポーツ教室など、感染対策が十分に取れる企画としたのである。

大きな混乱を避けるため、市民への周知は最小限としたこと、5月から10月へ開催時期が変更になったこと、2年振りの「チャレンジデー」ということなども重なり、住民の参加率は30.6%に留まる結果となったが、コロナ禍におけるイベントの難しさを実感することができたことは良かった点である。

6 コロナ禍におけるイベントの実施

北海道においては、2022年1月27日～3月24日の約2か月間、4度目のまん延防止等重点措置期間となり、再び社会・経済活動に制約が設けられる

こととなる。5月の最終水曜日に向けて「チャレンジデー」の準備を始める矢先の発令であったため、改めてイベント開催における感染対策を考えることとなる。

新たな変異株「オミクロン株」が猛威を振るっていたことから、2,000人以上の規模となり屋内に実施場所を移していた市民綱引き大会は、十分な換気対策や3密を防ぐなどの屋内イベントにおける感染対策が十分に確保できないと判断し、苦渋の決断ではあったが2年連続での中止とすることとなった。一方、屋外で開催をしてきた早朝ラジオ体操については、隣同士が2m以上の距離を確保できる、マスクをしながらでも体操ができる屋外のため、換気は十分と判断し、3年振りに復活させることとなる。併せて、今回は天候に左右される可能性はあるが、感染対策が取りやすい屋外イベントのみを企画することとし、新たに「なよろチャレウォーク」と銘打った、名寄の街を歩いて再認識する「街中ウォーキング」、正しい姿勢で無理なく歩く「ノルディックウォーキング」など「歩く」に焦点をあてたイベントを企画したのである。

昨年の開催経験を踏まえ、屋外においても感染対策が重要であることを再認識しながら、また天候が良くなることを祈りながら準備を進めたかいもあって、前日からの雨が嘘のように当日は天候に恵まれたのである。

住民の参加率は36.8%と昨年を上回ったものの、未だ終息が見えない新型コロナウイルス感染症により、外出を控えた住民も多かったと推測をしている。

7 結び

先日、町内会長と行政との懇談会が開催された。ある町内会長から「今年、3年振りに「チャレンジデー」で、朝のラジオ体操が出来て良かった。しかし、対戦した自治体には参加率で負けてしまった。やるからには相手に勝ちたいので、来年は是非、勝利に向けて頑張りたい。」とお言葉を頂いた。

当初の目的は、自分の健康は自分で守るとの健康づくりではあったが、住民が自らイベントに参加する意識が高まっていたことに、「チャレンジデー」が賑わいづくりや街づくりの一助になっていることを改めて実感することが出来た瞬間であった。

写真 3 過去の対戦記録

年	名寄市	対戦相手の参加率
1983	62%	① 網走市 62%
1984	63%	② 稚子市 61%
1985	61%	③ 紋別市 67%
1986	62%	④ 室蘭市 64%
1987	65%	⑤ 稚子市 65%
1988	50%	⑥ 釧路市 55%
1989	63%	⑦ 釧路市 62%
1990	63%	⑧ 釧路市 68%
1991	67%	⑨ 釧路市 50%
1992	61%	⑩ 釧路市 50%
1993	58%	⑪ 釧路市 35%
1994	58%	⑫ 釧路市 59%
1995	60%	⑬ 釧路市 60%
1996	60%	⑭ 釧路市 56%
1997	60%	⑮ 釧路市 63%
1998	61%	⑯ 釧路市 62%
1999	64%	⑰ 釧路市 64%
2000	65%	⑱ 釧路市 61%
2001	30%	⑲ 釧路市 43%
2002	36%	⑳ 釧路市 58%

出典：名寄市

写真 4 記念クリスタル (①左・②右)



出典：名寄市

① 10 年クリスタル

笹川財団主催「チャレンジデー」への通算 10 回
(’94～’03) 参加記念表彰

② 30 年クリスタル

ヘルシーコンペ時代から通算 30 回 (’88～’17) 開催をした特別表彰

名寄市は、1988 年のヘルシーコンペ時代から通算すると、来年の「チャレンジデー」が 36 回目となる。町内会長から頂いた言葉を糧に、これからも住民や企業、行政が一体となった健康づくりと住みよい街づくりを進めていきたいと考えている。